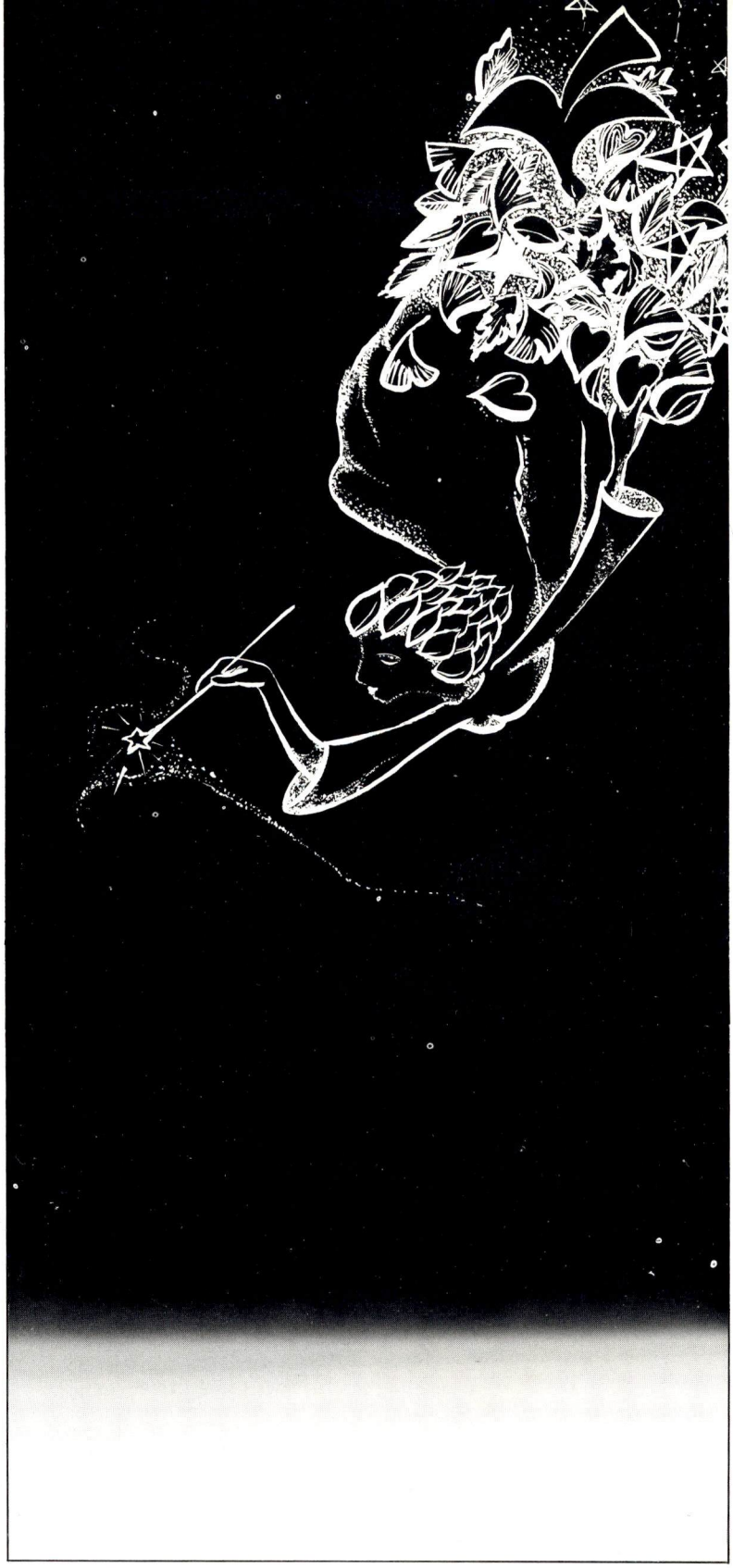


新響・“鯨”特別演奏会

第九

ベートーヴェン

Bach=Stokowski パッサカリアとフーガ ハ短調

L. V. Beethoven 交響曲第九番　合唱付ニ短調 ＯＰ125

＊ ＊ ＊

独唱

大川隆子

秋葉京子

金谷良三

田島好一

管弦楽　新交響楽団

合唱　合唱団“鯨”

指揮　芥川也寸志

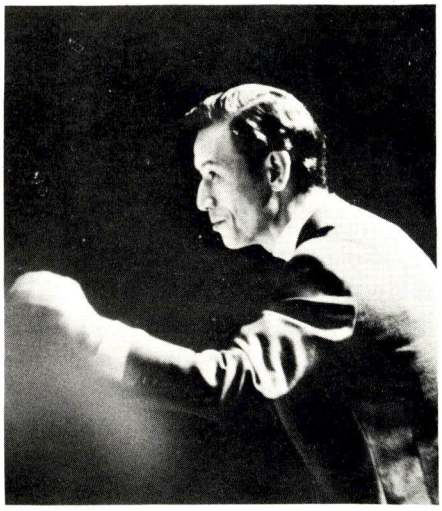


1971．12．15(水)・17(金) 7.00ＰＭ開演

日比谷公会堂

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志
Yasushi Akutagawa



1925年　東京生れ。
1949年　東京音楽学校研究科作曲部を卒業。
＜作品＞　交響三章、トリプティク、交響管弦楽のための音楽、弦楽のための三楽章、交響曲第1番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲。
1956年新響発足以来の常任指揮者であり、1969年音楽監督就任、1968年には合唱団“鯨”を組織するなど、アマチュア音楽界に於る貴重な指導者でもある。
日本作曲家協議会副会長、日本現代音楽協会会員。

——独唱者紹介——

ソラプノ　Soplano

大川　隆子　Takako Okawa



東京芸術大学卒業。畑中良輔に師事。1969年東京室内歌劇場公演オペラ「田舎の智恵者」のエウジェニアを演じ、1970年には二期会公演オペラ「カルメン」のミカエラを演じて好評を得、暮には日フィルの「第九」のソロを歌うなど着々と実績を作っている。
二期会会員

アルト　Alto

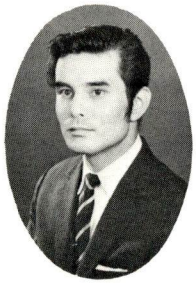
秋葉　京子　Kyoko Akiba



東京芸術大学卒業。平原寿恵子に師事。1971年二期会研究生存籍中に認められ、NHKオペラアワーに出演した他、二期会オペラ「リゴレット」のマッダレーナ及びジョヴァンナを演じたり、また文化庁青少年芸術劇場オペラ「蝶々夫人」にも出演して好評を得ている。
二期会研究生

テノール　Tenor

金谷　良三　Ryozo Kanaya



東京芸術大学卒業。薗田誠一、渡辺高之助に師事。第28回音楽コンクール入賞。東京混声合唱団創立以来の中心メンバーとして活躍している。スピントテナーの声質と演技は高く評価されオペラ公演、宗教曲にと、広いレパートリーで活躍している。

バス　Bass

田島　好一　Koichi Tajima



国立音学大学専攻科修了。1963年イタリアに留学、ローマ・サンタチェチリア音楽院アカデミアを首席で卒業。1965年ジュネーブ国際音楽コンクール第3位、ジーリ国際音楽コンクール第1位、等輝やかしい成果を収め、声楽界の至宝とされている。

あ　ん　で　い

プロローグ

音楽は、一切の智慧・一切の哲学よりも
　さらに高い啓示である。
……私の音楽の意味をつかみ得た人は、
　他の人々がひきずっている
　　あらゆる悲惨から脱却するに相違ない。
　　――ベートーヴェン

歓喜の主題が始めて現われようとする瞬間に、オーケストラは突如中止する。急な沈黙が来る。歓喜の歌の登場へ、この沈黙が一つの不思議な神々しい性格を与える。実際、この主題は一個の神ともいえるのである。超自然的な静けさをもってひろがりながら、歓喜は悩みを愛撫する。苦脳から力を快復して立ち上がる心の中へ喜びが辷り入るときに、それが与える第一の感銘は情愛の深さである。――「その優しい眼をみつめていると泣けて来る」とベートーヴェンの友が彼についていった感情を今ここにわれわれも感じさせられる。その音楽の主題がやがて声楽となって現われると、まずそれは、非常にまじめな、やや抑制された特質を持つ低音で示される。しかし、少しずつ歓喜は全体を手に入る。それは一つの征服である。テノールの熱烈な喘ぐような歌。それはわれわれがベートーヴェン自身の息の音を聴いているかと思うようなうち顫える部分である。――それは嵐の中を駆けめぐる老いたるリア王のように、デーモン的な心熱に憑かれながら野の中を作曲しながら駆けめぐるときの彼の呼吸と、霊感された叫びとのリズムである。戦士的な歓喜ののちに、宗教的恍惚感がやって来る。それから聖なる大祝祭、愛の有頂天。全人類が腕を天へ差し出して強い歓喜を挙げて、歓喜に向かって飛びかかり、胸の上にそれを抱きしめる。

第九の季節性……

「第九の季節性」といっては妙な表現になるが、日本ではここしばらくの間、例外的な場合をのぞいては、いつもおしつまった年末の恒例行事として、とりあげられるようで、各オーケストラが競いあって＜第九＞を上演するのにも現在ではほとんど抵抗を感じないし、このシーズン、第九は興業面でも外れたことがないほど、人気があることになっている。

日本の風土は四季のうつりかわりがはっきりし、自然に対し親和感の強い日本人には俳句の歳時記を例に出すまでもなく、身のまわりのすべてを無言のタブーでつつんでいるとすれば、当然音楽にも季節感といったものが、連想されるのは自然である。そうしてみれば、真夏の湿度の高い時に重厚な論理的な古典派の音楽がそぐわないという考え方もうなずけるが、師走のおしせまった頃に《第九交響曲》というのもこの曲の初演時期や、内容面からは理解できないことである。外国でも年末に＜第九＞をやることは珍しくないことだが、日本ほど季節的な行事になっていないとすれば、この原因はなにに求めたらよいのだろう。

一年の終り“師走”という言葉のなかには徒然草の昔から現在まであまり変りのない年末の雰囲気が秘められている。あわただしく騒々しいなかにも、活気がある日本の年末は、ゆく年への哀愁などよりはかすかな不安の中にも甘い期待が一ぱいに漂う新しい年への喜びが満ちているようだ。＜第九＞のもつ荘重な雰囲気と力にあふれた《歓喜の頌歌》はこうした年末、キリスト教徒風の終末観よりはずっと楽観的な“末広り”をことほぐ前夜祭の性格をもつもので、正月のイブとしての年末の気分をかざるにふさわしいものとしてとりあげられているのではなかろうか。

と同時に、“荘厳ミサ”などのように同じ時期のものでも宗教的にやかましい理解が必要でなく、もっとも普遍的な発想によっているだけに入り易いということもいえるだろう。

第九の魅力……

ところで、ある季節感と結びついてわれわれのなかに生きている《第九》の典礼的（？）な機能とは別に、この作品のもつ本質的な大きさは、理解の程度は別にして、否定し難い説得力をもってのしかかってくるし、魂のなかをゆさぶってやまないものだが、レコードの売れ行きや、コンサートの動員数とは無関係なその感動の質の深さは量的には計ることができない。とすれば作曲家と聴衆を結ぶきずな、作品の核心に逆にたどりつき、その作品が一つのインスピレーションにみちびかれて混とんから偉大な音のカテドラルにまできづきあげられた課程に目をそむけてその大きさを改めて納得することにしょう。

ふ　ろ　い　で　?!

第九交響曲はベートーヴェンの後期様式、巨匠晩年の深淵な思想と、雄大な構成力によってつくりあげられたもので、目もくらむようなその創造のるつぼのなかはとうていわれわれにはかいまみることも許されないものだが、友人のシントラーはものにつかれたようなその創造の歓喜と苦脳、狂気と感動が外例からは見わけのつかない恍惚の状態について語っている。ノードリングの別荘をおとずれた彼の目の前には夢中になって歌ったり、室内を歩き廻っている鬼気せまるベートーヴェン、まる二日間、寝ることも食べることも忘れた彼の創造の工房が伝えられているが、この烈しい洪水のような楽想を芸術作品にたかめるためには、なみなみならぬ知的な構成力と深い経験、永い熟成の期間が必要でありゲーテのファウストとともに第九交響曲は彼の一生を通じてねりにねられた作品であった。

ゲーテのファウストは文字通り彼の一生をかけた作品で、シュトラウスブルグで最初の第一幕に手をつけて以来、56年の時間がかけられている。1790年最初の“ファウスト”断章が公けにされ、1806年第一部が発表され、1824年第二部に着手、1831年完成までの永い熟成期間をへてでき上ったこの作品には、彼のすべてが抱括されているといってよい。疾風怒濤の若さ、慈愛、ワイマールの宮廷生活、古代世界の情熱等、ゲーテの多彩で全人的な生涯のすべてが凝縮されているといえるが、ベートーヴェンの第九もまさにこれと肩をならべる偉大な作品である。

第九交響曲の終楽章、あの力強い《歓喜の頌歌》の最初の呼動はすでに12歳のベートーヴェンのなかにあった。ヨーゼフ二世の死を悼み、レオポルド二世の即位を祝う彼のカンタータには、もちろんシラーの詩こそなけれ、歌詞と音楽のなかにこの方向への理想の最初の萌芽が明瞭によみとられるのである。シラーの“歓喜の歌”への音楽化はさらに数年後だが、これ以来最後のシンフォニーまで、たえずこの構想は、見えつ隠れつしながら彼の心の深層のなかで大きく成長していくのだった。音楽史家はこの深い無意識の底に秘められた彼の衝動がどんな形で大きくなっているかを詳細にのべている。

要は“歓喜の歌”にかぎらずこの作品全体がゲーテのファウストに比すべき彼の芸術の集大成ともいえるべき位置をしめているということである。

第九マニアは……

この曲をきいてみればよい。ベートーヴェンのこれまでの交響曲にない規模の大きさがまず第一に特徴的だ。第三交響曲がハイドンやモーツァルトの交響曲の次元を打ち破った大きさをもつものとして注目されたが、そのスケールの大きさも第九の比ではない。ハイリゲンシュタットの遺書を境に第五交響曲への道がベートーヴェンの古典的な完成への歩みを示すのだが、この静かな抒情詩的大きさは、第五をその部分として含むものといえるようだし、アダージョはこれと前後して書かれた“ハンマー・クラヴィーア・ソナタ”の神々しいほどの祈りの深さをみせるものである。

エピローグ

音楽は、
人々の精神から炎を打ち出さなければならない。
——ベートーヴェン

なぜ、一生を通じてベートーヴェンが執拗にまで《歓喜の頌歌》を追いかけたであろうか。

人々がつどいあい、幸福な日々の喜びを分ち合うということは一生彼の脳裏から離れない夢であった。憂鬱な少年時代、友もなく窓辺によりかかって一人ものおもいにふけっていた無口な少年の日から、ハイリゲンシュタットの遺書にあらわれた切実な声をへて晩年の諦観にみちた日まで、この夢は持ち続けられた。

第九と時を同じくして筆をすすめたといわれる“壮厳ミサ”に書きしるされた言葉“言葉より出ず、再び心にいたったことを”という一瞬は、今日もなお色あせず力強く働きかけてくる第九の響のなかに生きているといえよう。

（村上編）

ヨーロッパ歌い歩きの旅

合唱団“鯨”
鶴谷文彦　高橋章夫　板橋 稔

合唱団鯨のチョンガー3名が、ヨーロッパ、アフリカを、トリオを組んで歌い歩く計画をたてました。出発前の色々な難関を、みごと突破して、ついに、6月2日約100日間に渡る歌い歩きの旅に出発した。旅行中の日記からひろってみると……

6月21日……〔カメラの奇跡〕

6月21日朝フィンランドに別れを告げ、船でスウェーデンのウメオという町に渡る。ウメオの設備の行き届いた清潔なユースホステルに1泊し、翌日からバルト海の海岸沿いにスウェーデンを南下する。鉄道は金がかかるのでヒッチハイクである。しかし大きなリュックを担いで3人一諸にヒッチする事はまず不可能に近いので、板さんは1人。私は高橋君とペアになって別々にヒッチする事になっていた。目ざす 250km程離れたスンスバルという都市。そこのユースで会おうと約束して板さんと別れる。スンスバルに通じる国道の脇に立って手をあげる事30分。なかなか止らないのでイライラしていた時30才を少し越えた優しそうな婦人の運転する車が私達の前に止った。行先を聞くと何とスンスバルではないか。私達は大喜びで道端に置いた荷物を自動車のトランクにつめて、勇躍車に乗り込んだのである。これで苦労なく目的地に着ける。すっかり安心して運転席の婦人と楽しい話題に興じながら 100kmを越えるスピードでハイウェイをつっ走った。ところがである。ウメオを出発して1時間



半位した頃、高橋君がカメラがない!!後のトランクに入れたのかなーと言い出す。丁度カメラの事を話題にした直後である。念のために自動車を止めてもらって調べてみる。リュックの下。トランクの奥ない!いくら探してもないのである。そうだ、ヒッチした時荷物を道端に置きスンスバル一発という絶好の車が止ったものだから嬉しくて、大あわてで乗り込んだため、手荷物の蔭に置いたカメラを忘れてきてしまったのだ。さあ大変。あのカメラは友達から借りた高級カメラである。置き忘れてから1時間半経って、これから順調に戻ったとして3時間。誰かが見つけて持っていって、しまうだろう。しかし借りたカメラ故、最善を尽して探さなければならない。私達は荷物を自動車から下し、重い心で今来た道を引返したのである。こういう時に限ってヒッチは思う様に成功せず、3台乗りついで、5時頃ようやく最初にヒッチした場所にたどりつく。私達は念入りにそのあたりを探し回ったが、矢張りカメラは見つからなかった。最後にのせてくれた若いアベックの学生が非常に親切で私達を警察署まで連れていってポリスに尋ねてくれ、更にユースホステルまで送ってくれた。警察ではあの国道は沢山の若者がヒッチする場所で、多分彼等が持っていってしまい、見つからないでしょう、という事であった。カメラの持主に何とお詫びしようとガッカリしてその晩ユースに泊ったのである。

夜になってスンスバルの板さんから電話があった。“何をしているんだ。早く来いよ”“カメラをなくしてしまったんだ。”“カメラなんかどうだっていいよ”というやりとり。変な事を言う人だ、この大変な時に、と腹立たしく思っていると最後に“カメラはここにあるよ”という一言。びっくりして問いただしてみると実はこういう事だったのだ。

もう先にヒッチしてしまっていると思った板さんはスウェーデンのカワイコちゃんをハントする為に道草をくって、実は私達の後にはじめたのだった。そうして私達がヒッチした同じ場所に偶然さしかかり、カメラを見つけたのである。見たようなカメラがある、多分私達が置き忘れたのではないか、と思って持って来たら案の定そうだった、というわけである。暫くは信じる事が出来ず、ポカンとしていた。全く奇跡とも言うべきカメラの“生還”であった。

6月29日……〔ストックホルムの町角で歌う〕

ユースホステルが満員であったため、1日15クローナと少し高いＹＭＣＡに泊る。日本を離れて1ヶ月近く。バイカル号上のコンサート、レニングラードホテルでの演奏、レイクサンドの白夜祭における演奏会等の成果はあがってきているが、収入のある演奏がなく、物価高の北欧で出費ばかりかさむ事に不安を覚えて来ていた。何しろ日本を発つ時 700ドルしか持たず、それでは、帰りの旅費を引くと殆ど残らない。何とか滞在費を自分達で

稼がなければいけないのに、今のところ全く目途が立っていない。

そんな時、遅い朝食を終えて、フラッと町に出た私達の目にとまったのが、自動車が通らず、人通りの多いビルの谷間の4～5mの路地である。道の両側は商店になっていて、お昼時の買い物客や旅行者などで大変に賑わっていた。“ここで歌ってみないか”という板さんの誘い。タンパレの失敗が心に強く残っている事、余りにも沢山の人がいて照れ臭かった事、金を得るために歌う事が正当でないように思えた事。等々、さまざまな思惑が入りみだれ、いつまでも決心がつかず商店街を行ったり来たりしていた私達である。そうして30分近く行ったり来たりした末、ようやく心を据えて歌う決心をする。とあるコーヒーショップの店先であった。歌い出す時の



気まずさ一生懸命上を向いて歌っていた。“山寺の和尚さん……軽快なテンポの楽しいメロディーがビルの谷間に流れる。何が始まったのだろうと振り返る人々。アパートの窓から首を出す人々。そうして私達の前に1人2人と人が集まる。3曲程歌った所で、それからどうしたら良いか分らなくなり、人々に囲まれて照れ臭くなって帰ろうとした。すると目の前に3～4人固まっていた内の1人がツカツカと私達に近寄って来て、高橋君のかぶっていたチロルハットを下に置けと示す。そしてその中に1クローナ硬貨を投げ入れて引き下る。するとどうだろう。堰を切ったように、私達の周囲にいたお客さんが次々とコインを投げ入れてくれるではないか。……この一瞬の出来事に自信をつけ、気を良くして、あとからあとからレパートリーを歌い出した。通り過ぎる人が面白いようにお金を投げ入れてくれる。この時の感激は旅行中最大のものの一つであった。感激というより、嬉しいような、申し訳けないような、はずかしいような実に身のこわばるような思いだったのである。曲数にして13～5曲30分近いコンサートが終り硬貨がつまってずずっしり重い帽子を持って、近くの公園へ逃げるように歩いていった。この時はじめて町角で歌うという演奏形式が市民に受け入れられるものである事を知った。

お金を教えると、何と94.19クローナあった。（日本円で約6600円）驚きというか、喜びというか――。

その夕方同じ通りで場所を少し変えて再び“街頭演奏会”を開いた。

昼間より人通りは少なかったけれど、30分位歌って64.02クローナ（約4500円）の収入があった1日で一万円の収入である。

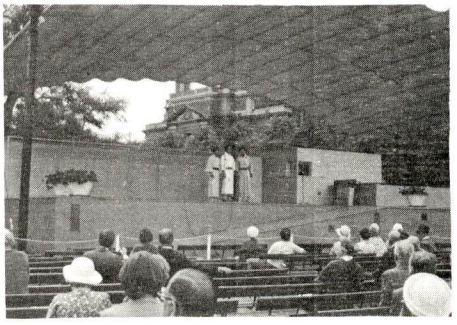
この経験にすっかり味をしめ、以後ヨーロッパの随所で、同様の“街頭演奏会”を持つ様になったのである。

……以下語り尽せぬ想い出が沢山ありますが紙面の関係もありますので下の写真から御想像下さい。

（鶴谷文彦記）



オスロ国立テレビ局のスタジオにて



スウェーデン、キングスカーデンホールでの演奏会



ソビエトの客船バイカル号での演奏会

新　交　響　楽　団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身と同じですが純然たるアマチュアのオーケストラで、名簿に見るように、サラリーマン、学生、主婦など、音楽を職業としない120名の団員から構成されています。

週1回木曜日、東京文化会館地下のリハーサル室での練習を基礎として、月々 400円の団費と、演奏会の収入による独立採算で運営されています。

昭和31年創立以来の常任指揮者芥川也寸志氏の献身的指導によって、現在日本で望み得る最高レベルのアマチュアオーケストラとされており、42年秋の訪ソ旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、週1回2時間半の練習、実質的には何の拘束もない任意団体であるという絶対的な制約をうけているため、累積赤字をかかえて常に解散の危機に瀕しているといっても過言ではないでしょう。

新響を存続させるものは、一諸にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通の目標となっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、できるだけ沢山の人に聴いてもらいたいという演奏団体としての活動です。今年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお迎えし、芥川先生とタクトを分担して頂くことにより、外部からの依頼にも応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

《新響の演奏会》

年4回の自主演奏会を軸に練習計画がたてられ、一つの演奏会には15回程度の練習をします。依頼演奏会は、3～4回で行うため、満足な演奏が難しいという団員からの不満があり、これをどう解決するかが演奏団体"新響"としてのカギとなります。

《新響の団員》

現在団員は120名弱で、休団者が10名おり、平常の練習には90名位の出席率になります。団員の入れ替りは、かなり激しく、平均的在団年数は3年以下です。従って⅓の団員は5年以上の年長組、⅓が3～4年在団、⅓は1年程度の新入組です。最近は大学オーケストラのトップクラスの卒業生が多くを占めるようになり、団に対する自主性と、制約された練習時間内での効率的な練習方法をどうすればよいかが最大の問題とされています。

《新響の運営》

団の最高の議決機関は年末に開かれる団員総会ですが具体的な活動計画は各パートから選ばれたパート委員による委員会が月1回開かれて決定されます。

演奏曲目は団員からの大まかな希望を参考として、音楽監督を中心とする数名で発案し委員会で承認して決まります。依頼演奏会は、スケジュール的に可能であれば過去の演奏曲目のなかから選びます。

日常の運営実行機関として事務局があり、会計、楽譜、会場予約、印刷、楽器運搬を行っています。団内での決定事項、練習日程等はほぼ隔週に発行されるB5版タイプ印刷の"新響ニュース"に書かれ、練習時間中の事務連絡を最小限にすると共に、団内のコミュニケーションの不足を補っています。

《新響の事務所》

信濃町と四谷三丁目の中間にある大湊ビル、東京混声合唱団の1室を合唱団鯨と共同で借用しています。4坪半で家賃は3万円余、日中（平日午後）は両団の団員が交替で勤務し、団員の出欠連絡、ガリ切り、通信事務を行っており、夜は、小単位のパート分奏、室内楽、各種会合に解放され、小さいながらフル回転しています。

《新響の聴衆》

アンケートから推定すると新響を聴いたことのある人が半数、初めての人が半数で意外と定着性がないというか、新響ファンが累乗的に増えているというか……

年令構成では20代までが7割以上、特に10代が半数であり、手頃な入場料により若い人々へのオーケストラ入門的役割を果しているわけで、俗に言うN響と都民劇場の会員層とは全く別の聴衆層を新響はもっていることがわかります。案内を発送して希望の時だけ入場券を購入して頂く登録会員は現在1200名、プレイガイドを含めて500枚位が団外で販売されています。　（太田記）

《新響の今年度の活動》

1月15日　足立区成人式祝典演奏会　足立区文化会館
交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、交響曲第5番「運命」＝ベートーベン

4月22日　第21回定期演奏会　虎ノ門ホール
管弦楽組曲第3番＝バッハ、バイオリン協奏曲＝ベートーベン、独奏：徳永二男、交響曲第3番＝ブラームス　同プロ **4月18日　千葉県文化会館**

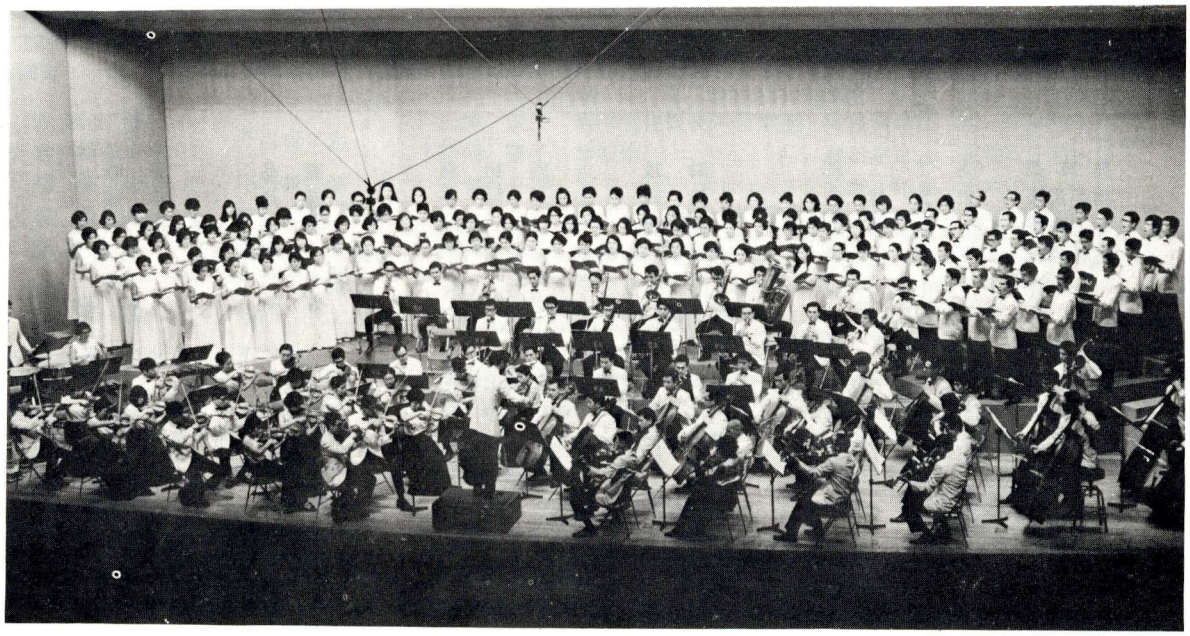
7月1日　合唱団鯨演奏会に出演　渋谷公会堂
弦楽のためのレクイエム＝武満　徹、レクイエムニフォーレ　指揮：小林研一郎
レクイエム＝モーツァルト

8月10日　サマーコンサート　東京文化会館
威風堂々＝エルガー　他行進曲5曲（指揮：芥川）
青少年の管弦楽入門＝ブリテン（指揮：小林研一郎）
シェーラザーデ＝R.コルサコフ（指揮：芥川也寸志）

8月20日　3Mクラブコンサート　郵便貯金ホール
上記ブリテンの代りに交響曲8番＝シューベルト

10月28日　第22回定期演奏会　厚生年金会館ホール
交響管弦楽のための音楽＝芥川也寸志、フルート協奏曲＝モーツァルト（澄川千津独奏）、交響曲第1番「巨人」＝マーラー

11月7日　東日本薬学生合唱連盟演奏会　郵便貯金会館
交響曲第9番＝ベートーベン　指揮：小林研一郎
（指揮は特記以外全て芥川也寸志）



合唱団“鯨”

合唱団鯨、その名前からはおよそ音楽団体とは想像できない様な私達の合唱団は1967年12月に発足して以来、ある時は潮を吹きアマチュア音楽界に波濤を投げかけ、またある時にはその重さに耐えかね巨体を持てあますなど紆余曲折の4年間を経て来ました。

私達の共通基盤は音楽をする事であり、それにより、音楽的感動を自ら修得し、更に多くの人々にも知ってもらい、その歓びを共有したいと願って活動しております。

1969年のハイドンのオラトリオ“四季”、ヘンデルの“救世主”1970年のハイドンのオラトリオ“天地創造”の上演に於ては既成の演奏会形式を変え、日本で初めての新訳、舞台形式という課題のもとで、わかりやすいオラトリオの上演に取り組みました。

また1970年の秋の東響の定期に於いて取り上げたオルフの世俗カンタータ“カルミナ・ブラーナ”の演奏は発足以来3年を経た合唱団鯨の著るしい進境を内外に示し、年末の恒例の第九の出演だけでも今回も含めて10回、更にテレビ出演も6回と、アマチュアの合唱団としては破格の活動を行ない、演奏団体としても着実に実績をあげてきています。

鯨の活動範囲は古典のみならず、ポピュラーの分野に於てもその一端をになっております。毎年春か秋に行なわれているポピュラーコンサートに於てはミュージカル、世界の民謡などを取り上げ、あらゆる人々に音楽の歓びを知ってもらおうと努力しております。

現在団員数は 140名であり、全て社会人より構成されており、音楽監督並びに常任指揮者に芥川也寸志氏、専属指揮者に小林研一郎氏を擁しております。

最近の主な活動

1970年

4月8日・ポピュラーコンサート　都市センター
はるにうたう

7月1日　合唱団“鯨”演奏会　渋谷公会堂
オラトリオ“天地創造”　ハイドン
管弦楽＝新交響楽団　指揮＝芥川也寸志

11月25日　東京交響楽団定期演奏会出演日比谷公会堂
カルミナ・ブラーナ

12月6日　TBSテレビ録画
交響曲第九番「合唱付」　ベートーベン
管弦楽＝東京交響楽団　指揮＝芥川也寸志

12月7日　東京交響楽団特別演奏会　日比谷公会堂
交響曲第九番「合唱付」　ベートーベン
合唱＝“鯨”、東混　指揮＝芥川也寸志

12月16日　東京交響楽団特別演奏会　日比谷公会堂
交響曲第九番「合唱付」　ベートーベン
合唱＝“鯨”　指揮＝デビット・カッツ

12月21日、23日　新響特別演奏会　共立講堂
交響曲第九番「合唱付」　ベートーベン
合唱＝“鯨”　指揮＝芥川也寸志

1971年

6月1日　合唱団“鯨”演奏会
レクイエム　フォーレ
レクイエム　モーツァルト
指揮＝芥川也寸志・小林研一郎

10月10日　TBSテレビ録画
南太平洋　他

10月19日　ファミリーコンサート　共立講堂
指揮＝芥川也寸志・小林研一郎

新響・新春特別演奏会

日　時　1972年2月7日(月)　午後7時
会　場　日比谷公会堂
曲　目　パッサカリアとフーガ　ハ短調……バッハ＝ストコフスキー
ヴァイオリン協奏曲　ホ短調……メンデルスゾーン
交響曲第1番　ニ短調　「巨人」……マーラー
演　奏　指揮：芥川也寸志　ヴァイオリン独奏：黒沼ゆり子　管弦楽：新交響楽団
入場料　S：1200円　A：1000円　B：800円　C：600円（全指定席）
主　催　(株)総合文化社　**後　援**　東京放送

新響・第23回定期演奏会

日　時　1972年4月2日(日)　午後6時半
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　交響曲第36番　ハ長調「リンツ」　K.425 ……モーツァルト
ピアノ協奏曲　第4番　作品58……ベートーベン
幻想交響曲　作品14……ベルリオーズ
演　奏　指揮：小林研一郎　ピアノ独奏：未定　管弦楽：新交響楽団
入場料　S：700円　A：500円　B：300円　(全席指定)

第10回合唱団“鯨”演奏会

《ブルックナーの夕》

日　時　1972年6月6日(火)　午時7時
会　場　日比谷公会堂
曲　目　テ・デムム……ブルックナー
ミサ曲　第3番　ヘ短調(「大ミサ」)……ブルックナー
演　奏　指揮：小林研一郎　独唱：未定　管弦楽：新交響楽団
入場料　未　定

合唱団“鯨”団員募集

ユニークな活動を続けてきた“鯨”がさらに意欲的な企画をもって創立5周年を迎えます。
この機会に是非、ご入団を……特に男性の入団を歓迎します。

〈指　揮〉　芥川　也寸志　　小林　研一郎
〈定期練習〉　毎週火曜日　渋谷カワイ楽器7階　カワイミュージックサロン　P.M. 6:00～9:00
〈練習曲目〉　上記のようにアマチュアとして、めったに演奏されることのない、ブルックナーの大曲にとり組みます。
〈申込先〉　〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル　合唱団“鯨”事務所(357)5255　(但し平日午後)